

誰にも属さない非物語

大村伸一

001 死刑

あるミステリー作家は、小説の中で人を殺した罪で刑期三年の死刑になった。大勢の処刑者が、彼の死を記述した。その記述が読まれるたびに、彼は死を体験した。三年の刑期を終えると、彼の死の記述は完全に焼却され、誰も読むことができなくされた。定められた刑を全うしたということだ。とはいえ、その記述を暗記し、時々思い出す処刑者もいないわけではなく、そんな時は彼は首が切断される瞬間を味わう。

002 願いのかなう町

その男の書くことが必ず本当になると言うので大勢の人が自分の望む未来を書いてもらおうと彼の元を訪れた。明日朝食が食べられますように。行列は町のすべての通りを埋め尽くしその最後尾を探すことも困難になっていた。彼が私に気づきますように。彼は大判のノートに濃い鉛筆で未来を書き付けたが、書かれたことが現実になるとその部分を服の肘のあたりで擦って消した。今度の大会で息子の順位が上がりますように。行列には終わりがなく、彼は自分の望みを書き留める暇もなかった。明日の料理は失敗しませんように。彼には食べる時間も眠る時間もなかったので、三週間目に死んでしまった。私の願いが叶いますように。それでも、彼の死体に向かって自分の願いを祈る人々の列は尽きない。